

二〇二二年度

二月二日午後入試（第四回）

国語（45分）

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答题紙の解答らんには、はっきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、4-1 から 4-12 まであります。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

高度経済成長期以前の日本、および現在の発展途上国の多くと比較して、いまの日本人は考えられないほど無駄にエネルギーと物資を使っている。それでも満足しないで更に便利で快適な生活を求める姿勢を改めず、しかも同時に「環境にやさしいライフスタイル」とか「持続的経済繁栄」などというキャッチフレーズを唱える人を見るたびに、私はこのような人たちは子供でも理解できることが全く分っていないと思う。

地球は一つの閉鎖循環系であり、いまのところ人間の力で地球外から物資を地球内に取込むことは不可能だし、人間にとって不用となった廃棄物を地球の外に排出することも出来ない。それなのに人間は、いまこの地球の無機有機の両者を併せた自然の循環を、過度の生産と消費活動によって、あらゆる点で妨げるとに血道を上げているのだ。

このことは地球を金魚鉢にたとえて見ると簡単に理解できる。ガラスの金魚鉢に、二、三匹の金魚と少量の藻を入れ、天然の水を満たした上でガラスの蓋をする。そしてこの鉢を適当に日光の当る場所に置けば、外部から水や餌を補給しなくても、金魚は長い間丈夫に生き続けることができる。

ところが条件を同じにしておいて、ただ金魚の数だけを十匹にも増やすと、すぐに死ぬものが出始め、それが腐り水が濁って、結局金魚は全滅してしまう。

金魚が少ない時は、日光によって藻が呼吸して金魚に必要な酸素を出し、同時に不要な炭酸ガスを吸収してくれる。水や藻に付着していた各種のプランクトンや苔が繁殖して魚の餌となる。そして金魚にとって有害な排泄物は、藻や他の微生物の栄養として吸収されてしまうから水が汚れない。このようにして安定し持続する物質循環が、金魚鉢という小宇宙の中に成立するのである。

しかし鉢の大きさに比べて金魚の数が多すぎる場合は、水中の酸素が不足し、金魚の排泄物が水の中に残ってしまうから、金魚が死ぬことになる。

地球という金魚鉢では、いままさにこのことが起り始めていると考えられる。いまのところ人間自身が死ぬ迄には至っていないが、人間以外の野生動物はすでに次々と絶滅している。資源は涸渇し、大気の汚染は進む。他方分解吸収されない廃棄物は溜る一方である。地球は金魚鉢とは桁違いに大きく、またその中の生態系や物質循環のしくみも遙かに複雑だから、破滅的な状態に至るまでには時間もかかるし、いろいろな紆余曲折もあって簡単に直線的には行かない。

だがこのまま進めば人間にとってもカタストロフィは確実に来る。しかしいつどのような形でそれが訪れるかはいまのところ誰にも分らないのである。気象学者、生物学者そして人口学者、経済学者の中にも悲観論と楽観論が対立している。地球温暖化やオゾンホールの影響をめぐってすら賛否両論がある段階だ。つまり「科学的」には、このまま行くと地球は大変なことになるという見方について、万人が認める証明は未だ出来ていないのである。

しかし私は地球の将来、人類の運命を科学者の手に托することは全く意味がないと考えている。良心的な科学者ほど充分なデータを集め、それを分析し、確信が持てるまでは判断を下さないものだからだ。そして殆どの科学者たちが確信を持って、地球は破滅すると言い出した時は、もう遅いのである。その時になってからでは、後に戻れないからである。

舟に荷物を次々と積み込んで、まだ大丈夫と言っている内に、突然傾き出す。この時になって、舟が沈むのは間違いないなどと聞かされてももう遅いのもと同じく、^⑤ 充分安全な範囲で荷を積むのを止めることが賢明

というものであろう。

その意味で私は地球号という宇宙船は、とつくに転覆か爆発かの危険ラインを越してしまったと確信している。だからかけがえのない、この美しい世界を、一かバチかの賭の対象にはしたくない。これだけ各方面から危険信号と警告が出ているのだから、まだ大丈夫だろうという楽観論に与することは真平御免である。

これ以上のエネルギーと資源の浪費を前提とする経済発展を止めるべきである。もつと低い経済のレベル、消費の水準でも人間は幸福に生きられる。いま一番大切なことは、社会に急激な大混乱を起さず、延び切ってしまった経済戦線を徐々に計画的に一体どこまで整理縮小することが出来るかを真剣に討議することである。そして日本や西欧先進国が消費を下げた分のエネルギーや物資を、未だ豊かさを味わったことのない、途上国に廻さなくてはならない。

世界の「経済のパイ」を大きくするのではない。資源エネルギー、そして環境の許容度はもうこれ以上大きくは出来ない。途上国の生活水準を上げるためには、先進国が更なる経済発展を遂げ、そのスプール・オーバー・エフェクト（余剰波及効果）に期待するしかないという、一部経済学者たちの考えは、地球というパリの有限性についての認識が全く欠如していると言わざるを得ない。

しかもこのように地球全体の経済活動を一定限度に抑えても、当分世界の人口増は進むのだから、逆に一人当りのエネルギーや物資の可能な使用量はどんどん小さくなるわけである。

いま地球の総人口のほぼ四分の一に当る日本を含んだ先進国が、贅沢の限りを尽した生活を営めるのも、一人ひとりが自覚しているかどうかとは無関係に、人口では三倍以上も多い途上国を構造的に押えつけているという力学の上ではじめて可能になっていくことを見逃してはいけない。

人がもし口だけでなく心から世界の人々の平等を望み、しかもこの美しい地球を損わず子孫に伝えたいと思うなら、なすべきことは次の二つに絞られる。第一は先進国経済のレベルを下げ、人々がもつと少ないもので幸福に生きる道を真剣に、しかも大至急模索すること。第二は持てる国と持たざる国、富める国と貧しい国との間での、地球規模の資源エネルギー消費の再配分を、どうやったら少ない摩擦と混乱で達成できるかを本気で考えることである。

今日の日本のように贅沢になってしまった社会を、^⑦反対の方向に後戻りさせることは、並大抵のことでは出来ない。私たち人間は一度手にした豊かさや便利さを、余ほどの外圧でもない限り自発的には手放さないものだからである。

殊に日本や欧米諸国のように、国民の一人ひとりが強い権利意識を持ち、自己を主張することが美德と考えられてきた、いわゆる民主的な社会では、一握りの権力者が独裁的に、国民の進む道を勝手に決めて強制することが出来ない。それだけに国民の一人ひとりが、もうこれまでのような贅沢な暮らし、物資やエネルギーを浪費する生活態度は続けられないという、切実な自覚を持たなければ変革を起すことは至難の業である。

更に問題の解決を難しくしている点は、実は地球規模で起っている各種の問題は、一般の人々にとつては見たこともない遙か遠い国の話か、自分が生きている間に起るのかどうかも分らない、真に実感の薄い危機や破滅のことが多いことである。

たとえばテレビのニュースで、中央アジアのアラル海が、近い将来に人為的な水の使い過ぎで完全に消滅することが確実視されているといったことを見聞きしても、だからといって周章狼狽する日本人は殆どいないだろう。^⑧

そして更に、このような大問題を知らされたからといって、自分の日常生活での具体的なあれこれを改めようとする人など、先ず一人もいないと思う。

しかしこの同じ日本人が、仮にもシアルル海の僅か百分の一の大きさしかない琵琶湖が、近い内に干上がってしまう虞れがあるなどというのを聞けば、それは一大事だということになって、原因究明に大勢の学者が立上り、政府は対策に奔走し、民間からも助力援助を申し出る人が沢山現われるに違いない。

しかしこのような反応の違いは日本人のエゴイズムでも何でもなく、むしろ人間として自然で当然なことなのである。自分たちに馴染みのない、しかも何千キロも遠い所で起っていることに対して、身近で起っていることと同じ反応を期待する方が無理なのだ。

人間として生物の一種であり、そしていかなる生物も広大な地球全体を一望の下に見わたし、世界中の出来事に直接反応し適切に対応するには、体も心も出来ていないのである。

最近のように地球の全地域がオンラインで結ばれ、人工衛星を介して世界中の動きを瞬時に知ることができ、同じ日の内に世界の主要都市の殆どをジェット機で訪れることが可能であるといった状況は、体はまだしも普通の人間の心の対応処理能力を超えた、不自然で無理なことなのである。

だからビアフラで内戦のために何百万という人が死に、パレスチナやユーゴスラビアでは悲惨なテロや殺戮が、いつ終るとも知れずに続いていることを、私たちは知識として知ってはいても、一般の人がそのことと自分たちの恵まれた安全で快適な生活との関連など、深く考えもしないのは、別に冷酷でも何でもない。そうでなければ「身がもたない」のだ。

要するに我々人間は身近な者の不幸に一喜一憂し、目前の危険におののき、直接の利害をむきになって争うという、生物一般に共通する原理で動いていることを改めて認識する必要がある。

⑩ところが困ったことは、極く身近な見渡しのきく、狭い範囲の生活圏の中で起る問題にだけ対応するよう

に出来ている私たちが、生産活動や日常の消費生活の面では、国際化どころか地球化してしまったのである。食料の大半をはじめとして身の廻りの雑貨類や電気製品のかかなりの部分すら、殆ど全世界的なひろがりを持つ国々からの輸入品で占められている。第一、戦後日本の未曾有の経済成長を築き現在の繁栄を支えている石油が、年により多少の変動はあるものの、その殆ど全部を遙か彼方の湾岸諸国、メキシコそしてインドネシアといった産油国に依存しているのだ。⑪よく日本は石油の海に浮んだ小島だと言われる所以である。

しかしこのような物資や資源の流通、エネルギーの輸出入が地球規模で行われるようになったのは、何も日本ばかりではなく、程度の差こそあれ全地球的な現象なのだ。多国籍企業の激増、経済のボーダーレス化、そしてE.Cの誕生といったことは、すべて地球の上を膨大なエネルギーを使う飛行機や船舶、列車やトラックの大群が、昼夜を分たず、それこそ気の遠くなるような夥しい数で飛び廻り動き廻ることを前提にしているのである。

だが日本の消費者に限らずどこでも、スーパーの棚の前で、あれこれと必需品を選ぶとき、一つ一つの品物の由来する遠い国の社会情勢に思いをはせ、それを作りはるばると運んでくるために使われた莫大なエネルギーや物資、そしてそこに不可避に付随する環境の汚染や破壊などを考える人はいない。もしそんな人が日本に少数でもいれば、近年フランスなどから美味しいからといって、ビンやペットボトルに詰めたただの水を、飛行機で運んでくるといった非常識な商売が繁盛する筈がない。⑫統計によれば、日本でのミネラルウォーターの輸入は、不況風をよそに年々増加の一途を辿っている。

日本で産出しない資源や、日本で作れないものを輸入するというならまだ分る。それを大したこともないただの水を、外国から空輸する必要がどこにあるのだろうか。おいしい水を飲みたければ、この世界でも有

数の雨の多い日本で、何故おいしい水が飲めなくなったのかを考え、その問題を解決することに金を使うべきではないだろうか。

私は金がある人が買うのだから別にかまわない、儲かるものは何でも商売になるというマーケットメカニズムなどというものに世界の経済をまかせておけない段階に地球は来ていると思う。そこまでしなければ果して人間は幸福になれないのかという、欲望の限界、行為の善悪についての価値判断を下す時が来ている。経済人や技術者ではなく、思想家の立場から生活を見直さなくてはならない。その規準となるものが、神ではなく地球の保全と安定を考える地救(球)原理^⑬なのである。

(鈴木孝夫『人にはどれだけの物が必要か』より)

※(注) 無機——生き物でないもの。

有機——生き物。

血道を上げている——熱中する。

カタストロフィ——大災害、破滅。

オゾンホール——上空にあるオゾン層がフロンガスなどによってこわされ、あなが空いたようになつた部分。生物に有害な紫外線が通りやすいとされる。

バイ——分け合うべき利益などの全体、分け前・取り分。

スピル・オーバー・エフェクト——効果が意図した範囲をこえて別のものにもおよぶこと。ここでは先進国の発展が途上国にも利益をもたらすこと。

周章狼狽——非常にあわてること。

エゴイズム——自分の利益だけを考え、ほかの人のことを考えないこと。

ピアフラ——アフリカにあった国。一九六七年にナイジェリアから独立して成立したが内戦状態となり、一九七〇年にふたたびナイジェリアに併合された。

ユーゴスラビア——かつて南東ヨーロッパにあった国。現在はセルビアなど、いくつかの国に分かれている。

EC——ヨーロッパ共同体。現在のEU(ヨーロッパ連合)の前身。

問一——線①「私はこのような人たちは子供でも理解できることが全く分っていないと思う。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「このような人たち」の説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 無駄なエネルギーや物資を使った生活に不満や問題を感じ、生活を改めて「環境にやさしいライフスタイル」を実現しようとする人。
- イ 「持続的経済繁栄」の実現のために環境を気にせず、より多くのエネルギーや物資を用い、更に便利で快適な生活を目指そうとする人。
- ウ 無駄にエネルギーや物資を使った生活を続けたまま改めようとせずに、「環境にやさしいライフスタイル」などと言っている人。
- エ 「持続的経済繁栄」を実現してより便利で快適な生活を目指しているのに、エネルギーや物資の無駄使いを改めようとしている人。

2 筆者の言う「子供でも理解できること」とはどのようなことだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 途上国よりも多くのエネルギーや物資を使わなければ、便利で豊かな生活は送れないということ。
- イ 地球の外から物資を取りこんだり、外へ廃棄物を捨てることは今の技術では不可能だということ。
- ウ 今後は環境を守りながら持続的な経済繁栄や便利で豊かな生活を目指すことが大切だということ。
- エ 過度の生産や消費活動を続けたまま、環境にやさしい生活を実現することはできないということ。

問二——線②「条件を同じにしておいて」とありますが、ここでの「同じにしておく」「条件」としてあげてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア ガラスの金魚鉢にガラスの蓋をすること。
- イ 金魚鉢の中に藻を入れて水道水で満たすこと。
- ウ 日光の当る場所に金魚鉢を置いておくこと。
- エ 金魚鉢の中に外から水や餌を与えないこと。

問三 —— 線③「地球という金魚鉢では、いままさにこのことが起り始めていると考えられる。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「地球という金魚鉢」とありますが、「金魚鉢」とは「地球」の中のどのようなしくみをたとえたものですか。文中から十字以上十五字以内でぬき出して答えなさい。

2 「このことが起り始めている」とありますが、地球で「起り始めている」「このこと」とはどのようなことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 光合成によって酸素が発生し、微生物が有害な排泄物を吸収して地球環境が安定すること。
- イ 有害なプランクトンが増加し、酸素の不足と排泄物の増加によって野生動物が絶滅すること。
- ウ 空気中の酸素が不足し、地球温暖化が進んでいき、オゾンホールに悪い影響が現れること。
- エ 資源が涸渇して大気汚染が進み、分解吸収されない廃棄物が溜って野生動物が絶滅すること。

問四 —— 線④「しかし私は地球の将来、人類の運命を科学者の手に托することは全く意味がないと考えている。」とありますが、筆者がこのように「考えている」のはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 良心的な科学者ほど確信を持つまでは判断を下さないものであり、科学者たちが地球の破滅を確信したときには手遅れになってしまっているから。
- イ 良心的な科学者ほどデータの収集や分析に時間をかけるうえに、地球や人類の将来を一かバチかの賭の対象にはしたくないと考えて予測をしたがらないから。
- ウ 様々な分野の学者たちは悲観論と楽観論とで対立ばかりしており、協力し合って地球の危機について万人が認める証明をしようとしたがらないから。
- エ 様々な分野の学者たちも地球の危機について賛否両論がある段階であり、今後も科学的に地球の破滅がいつやってくるかを正確に予測することは不可能だから。

問五 —— 線⑤「充分安全な範囲で荷を積むのを止めることが賢明というものである。」とありますが、筆者は「舟」のたとえ話をういてどのようなことを言おうとしているのですか。それを説明した次の文の□にあてはまる言葉を文中から三十五字でぬき出し、初めと終わりの五字をそれぞれ答えなさい。

地球に破滅がやってくる前に □ ということ。

問六 ——線⑥「人口では三倍以上も多い途上国を構造的に押えつけている」という力学の上ではじめて可能になっていることを見逃してはいけない。」とありますが、「人口では三倍以上も多い途上国を構造的に押えつけている」とはどのようなことだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを選択し、その記号を答えなさい。

ア 途上国の多くは人口が多いために不足しがちなエネルギーや資源を先進国に分けてもらわなくては生活が成立しないということ。

イ 日本を含んだ先進国が有限であるエネルギーや物資を途上国にまわさずに自分たちだけ贅沢な生活を営んでいるということ。

ウ 途上国では人口増加によって国民一人当りのエネルギーや物資の使用量が先進国よりも少なくなっているということ。

エ 日本や多くの先進国は途上国の人口増加を押さえることで地球全体のエネルギー消費量を小さくしているということ。

問七 ——線⑦「反対の方向に後戻りさせることは、並大抵のことでは出来ない。」とありますが、「並大抵のことでは出来ない」のはなぜですか。できるだけ文中の言葉を使って三十字以内で答えなさい。

問八 ——線⑧「だからといって周章狼狽する日本人は殆どいないだろう。」とありますが、なぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 日本人は一人ひとりが強い権利意識を持っており、アラル海のことよりも自分の日常生活を大事にしたいと考えているから。

イ 一人ひとりの日本人は地球規模の問題を切実に受け止めているものの、生活態度を改めるよう強制されることはないから。

ウ 多くの日本人にとってアラル海は身近なものではなく、実感がわかないので自身の問題として考えることができないから。

エ 日本人の大多数にとって地球規模の問題は、学者が原因を究明して政府が解決に動いてくれるものだと考えられているから。

問九 ——線⑨「しかしこのような反応の違いは日本人のエゴイズムでも何でもなく、むしろ人間として自然で当然なことなのである。」とありますが、筆者がこのように考えるのはなぜですか。それを説明した次の文の□にあてはまる言葉を文中から三十字以上三十五字以内でぬき出し、その初めと終わりの五字を答えなさい。

人間は□□□□□から。

問十 ——— 線⑩「ところが困ったことは、国際化どころか地球化してしまったのである。」とありますが、筆者が「地球化し」たことを「困ったこと」と言うのはなぜだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 一人ひとりの人間の能力は国際的な問題のすべてに対応できるほど高くはないのに、地球環境を守るためには世界各地で起きているすべての問題について認識しなければならぬから。
- イ 人間は自分の身近な問題にしか反応できないという生物一般に共通する原理で動いているにも関わらず、国際化が進んだことで遠い外国で起きている不幸にも一喜一憂させられてしまうから。
- ウ 生産活動や日常生活のために他国から物資を輸入するだけではなく、地球の全地域がオンラインによって結ばれたことで、世界各地で発生する内戦やテロが自国でも発生するようになったから。
- エ 日常生活に必要な資源やエネルギーの輸出入は地球規模で行われており、他国の問題が自国にも影響を与えるのに、自分にとって身近な生活の問題として実感することができないから。

問十一 ——— 線⑪「よく日本は石油の海に浮んだ小島だと言われる所以である。」とありますが、この表現に関する説明として最も適当だと考えられるものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 「石油の海に浮んだ小島」という表現は日本が資源の豊かな海に囲まれており、世界中のどこからでも自由に石油を輸入できるめぐまれた環境であることを表現している。
- イ 「石油の海に浮んだ小島」という表現には資源に乏しい日本の繁栄は他国から輸入される石油に支えられたものであり、同時に不安定なものだという意味がこめられている。
- ウ 「石油の海」という表現は石油をはじめとするエネルギーの輸出入が地球規模で行われており、海に囲まれた日本の場合には主に船によって行われていることを示している。
- エ 「石油の海」という表現には現在進んでいる経済のボーダーレス化が海のように無限に広がり続け、日本をますます繁栄させてほしいという希望がこめられている。

問十三 — 線⑫ 「統計によれば、日本でのミネラルウォーターの輸入は、不況風をよそに年々増加の一途を辿っている。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「ミネラルウォーターの輸入」について、筆者はどのようなものかと考えていますか。それが書かれている部分を文中から五字以上十字以内でぬき出して答えなさい。

2 「日本でのミネラルウォーターの輸入」が「年々増加の一途を辿っている」理由について筆者はどのように考えていますか。次のア～エの中からあてはまるものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 輸入によって生じる様々な問題を考えて買い物をする人はほとんどいないうえに、儲かればよいという考え方が広まってしまったから。

イ 日本人の多くは海外から輸入したの方が国産品よりもよいと思いこんでおり、日本の水の美味しさに気付いていないから。

ウ 雨量が減ったために安全な水を飲むことができなくなっており、輸送のエネルギーを使っても海外から輸入しなくてはならないから。

エ フランスなどからビンやペットボトルに詰めて輸入した水の方が日本の水道水よりも安くくておいしく、たくさん売れて儲かるから。

問十三 — 線⑬ 「地救（球）原理」とありますが、本文全体をふまえて筆者の考える「地救（球）原理」とはどのようなことかと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 物資やエネルギーの浪費にたよらずに儲かる商売の方法を考え、途上国もふくめた全人類が豊かさを味わえるような持続的経済繁栄を目指すこと。

イ 先進国が更なる経済発展を遂げることで途上国を支援するとともに、環境にやさしいライフスタイルを確立して地球環境の保全をはかること。

ウ エネルギーと資源の浪費を前提とした一部の地域の豊かさを求める経済発展を見直し、人類全体の幸福や地球環境の保全と安定を目指すこと。

エ 先進国も途上国もこれ以上の便利さや快適さを求めることをやめて現在の生活水準に満足し、幸福になることをあきらめて地球を守ること。

問十四 本文は平成六（一九九六）年に発表されたものです。本文で書かれていたエネルギーの輸出入について、本文と後の資料とを見比べたときに考えられることとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 日本のエネルギー自給率は二〇一二年から二〇一八年にかけて上昇し続けており、本文が発表された一九九六年当時に筆者が問題だと考えていた「エネルギーの輸出入」によって生じる環境汚染は現代の日本ではすでに解決したと考えられる。

イ 本文が発表された一九九六ごろの日本は石油の輸入についてメキシコやインドネシアなどの「産油国に依存」していたが、二〇一八年のデータによると現在ではノルウェーやオーストラリアに依存するようになったと考えられる。

ウ 筆者は「エネルギーの輸出入」を「全地球的な現象」と述べていたが、本文の発表された一九九六年に日本より低かった韓国のエネルギー自給率は二〇一八年には日本を上回るようになり、世界中で日本だけ状況が悪化していると考えられる。

エ 二〇一八年時点の他の先進国や、本文が発表された一九九六年当時の日本と比べても現在の日本のエネルギー自給率は改善したとは言えず、本文で取り上げられていた「エネルギーの輸出入」をめぐる問題は現在の日本でも課題だと考えられる。

先進国のエネルギー自給率

順位	国名	エネルギー自給率(2018年)
1	ノルウェー	700.3%
2	オーストラリア	320.0%
3	カナダ	175.8%
5	アメリカ	97.7%
11	イギリス	70.4%
16	フランス	55.1%
22	ドイツ	37.4%
29	スペイン	27.4%
33	韓国	16.0%
34	日本	11.8%
35	ルクセンブルク	5.3%

※エネルギーとは石油、原油、天然ガス、原子力、水力、再生エネルギーを指します。

※資源エネルギー庁のHP

(https://www.enecho.meti.go.jp/about/special/johoteiky/energyissue2020_1.html)を元に作成。

日本のエネルギー自給率推移

年度	自給率	年度	自給率
1995年	19.8%	2007年	18.0%
1996年	20.0%	2008年	18.3%
1997年	20.7%	2009年	20.4%
1998年	21.6%	2010年	20.3%
1999年	20.4%	2011年	11.6%
2000年	20.2%	2012年	6.7%
2001年	20.3%	2013年	6.6%
2002年	19.2%	2014年	6.4%
2003年	16.8%	2015年	7.4%
2004年	18.4%	2016年	8.2%
2005年	19.6%	2017年	9.5%
2006年	19.8%	2018年	11.8%

※エネルギー自給率とは生活や経済活動に必要な一次エネルギーのうち、国内で確保できる比率のことです。

※経済産業省 資源エネルギー庁『平成30年度(2018年度)におけるエネルギー需給実績(確報)』を元に作成。

二 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 生産量が大きくカコウする。
- ② 自動車は日本のキカン産業の一つだ。
- ③ 新しい法令をコウフする。
- ④ かぜをひいた弟のカンビョウをする。
- ⑤ この問題は判断にマヨウ。

問二 次の①～⑤の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 船が汽笛を鳴らして出港する。
- ② 兄は文学研究に従事している。
- ③ 彼の功績は枚挙にいとまがない。
- ④ 集めた情報を取捨する。
- ⑤ 文化祭の出店についてクラスの決を採る。

問三 次の①～④の熟語の組み立ての説明として最も適当なものを後のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- ① 作文 ② 若葉 ③ 絵画 ④ 国営

- ア 上の漢字と下の漢字が主語と述語の関係になっているもの (例 年長)
- イ 上の漢字が下の漢字を修飾する関係になっているもの (例 白雲)
- ウ 下の漢字が上の漢字の動作の対象を表しているもの (例 読書)
- エ 似た意味同士の漢字が重なっているもの (例 温暖)
- オ 意味が反対になっている漢字が組み合わさっているもの (例 高低)

問四 次の①～③の四字熟語の意味として最も適当なものを後のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- ① 電光石火 ② 有名無実 ③ 品行方正

- ア 落ち着きがあつて物事に動じないこと。
 イ 行いや心が正しく立派であること。
 ウ 世間で広く知られていること。
 エ 動作がとてすばやいこと。
 オ 名前ばかりで中身がともなっていないこと。

問五 次の①～③の文中の の言葉は、同じ文中の——線ア～オのどこにかかりますか。その記号を答えなさい。

- | | | | | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|---|-------|---|-------|---|-------|
| ① | 雪で | ア | 真っ白に | イ | 染まった | ウ | 公園で | エ | 友だちと | オ | 遊んだ。 |
| ② | わたしの | ア | となり | イ | 妹も | ウ | やってきて | エ | いっしょに | オ | ならんだ。 |
| ③ | 秘密を | ア | クラスの | イ | 親しい | ウ | 友人だけに | エ | こっそりと | オ | 教えた。 |

